

〔翻訳〕

「オグズ・ナーメ」研究における諸問題

海熱提江・烏斯曼 著
西脇隆夫 訳

訳者まえがき

この訳稿は、新疆大学の海熱提江・烏斯曼教授によって書かれた「烏古斯史詩研究的若干問題」を訳出したものである。原文は同教授の著書『古代維吾爾古典文学研究』（新疆大学出版社1999年）の46～66頁に収められている。

同教授の経歴と著書などについては、「名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇」第40巻第2号に発表した拙訳の訳者まえがきですでに紹介した。

「オグズ・ナーメ」はウイグルなどテュルク系諸民族の古代叙事詩であり^①、ウイグルなどの民族に伝えられてきた民族の祖先の伝記である^②。きわめて重要な学術的価値をそなえ、研究するに値しよう。

§1 「オグズ・ナーメ」テキストの分析

この作品には現在まで数種のテキストが伝えられ、ウイグル語とその他の民族語の版本があるだけでなく、内容と様式においてもそれぞれ違いが見られる。

1. ウイグルーテュルク語版

第1種は古本で、「A」本と言われている。回鶻（ウイグル）語写本はパリの国立図書館（Bibliothèque Nationale）が現存し、所蔵番号はSuppl.turc,1001（いわゆるChy. Scherfer収蔵本）である。写本は草書体の回鶻文字で書かれ、末尾の部分が欠落している。寸法は19cm×13cm、全21頁、42葉、毎葉9行。

国内外の学者はこの写本の言語が古代後期ウイグル語に属すると見なしている^③。

「オグズ・ナーメ」は散文形式であるけれども、一部に韻文をまじえ、つぎのような一節は8音節の詩歌形式のように韻を踏んでいる。

Men senlerge boldum kaghan
alal ıng ya takıkkalkan;

tamgha bizge bolsun buyan,
køk beri bolsunhıl uran,
temür jıdalar bolusun orman,
aw yerde yürüsün kulan;
taki taluy akı müren,
kün tugh bolghıl kok kurıkan

われこそは汝らの可汗
汝ら、盾と弓矢持ってわれに従って征戦に行かん
部族のしるべをわれらが吉兆として
蒼き狼をわれらがいくさの雄たけびせん
われらが鉄の矛を林のごとくして
野の馬ををわれらが狩場に走らせん
我らが土地に河水を流して
太陽を旗印、青天をテントにいたそう

また、大臣ウルグ・トゥルク（烏魯克・吐魯克 Ulugh Turk）のことは13音節で構成された詩句である。

Ay kaghanum senge yaxaghu bolsung-hıl uzun,
ay kaghanum senge törülük bolsung-hıl tüzün;
benge køk tengri berdi tüzümde keldür-sun
talay tarur yerni urunggha berdür-sun

ああ、わが可汗よ、どうか長生きであれ！
ああ、わが可汗よ、わが国の法制が公正であれ！
上天よ、わが夢の中に効験を現わせたまえ！
あなたの征服された国土の子孫が栄えんことを！

この他に、叙事詩の中では多くの文が表面は散文に似ているが、分析すると、それらのあいだには強いリズム感が存在していることに気がつく。

oxul oghulnung öngluki qiraghi kökerdi,
aghızı atax kızıl erdi kózleri al
saqları kaxları kara erdiler erdi,

このおのこの顔は青く
口は真っ赤で、眼は赤い
髪の毛と眉毛は黒い

この他に、多くの対句の使用も叙事詩のリズム性を強めている。

要するに、以上の分析によれば、「オグズ・ナーメ」は特定の曲調の伴奏でうたうことができると思われる。

第2種は、『ガザルのオグズ・ナーメ』(Nazmi oghuzname)。または「詩歌体のオグズ・ナーメ」すなわち「オグズ・ナーメの詩歌体」と訳す。トルコの文学者はそれを『Uzun kwruk—長橋』本(長橋は『ガザルのオグズ・ナーメ』が発見された場所)と称し、「真理への入門」と合本にしている。近年トルコの「Türkiyat—突厥叢書」第18巻に発表された。トルコの学者フセイン・ナミク・オルホン(侯賽因・那米克・顎爾渾)はこの書の言語が『真理への入門』の言語と同じであると考えている。もう一人の学者カマル・アルスラン(喀瑪爾・阿爾斯蘭 Kamal Arslan)は言語的な特色により、この書の言語が東方テュルク語(回鶻—ウイグル語—引用者注)であり、13世紀後期から14世紀初期に属し、チャガタイ・ウイグル語の時期に属していると思なしている。

『ガザルのオグズ・ナーメ』は二行の対句形式であり、対句は104行、総行数は208行、4枚、8葉、毎葉13対句、26行。トゥルソン・ウジョル(吐爾遜・烏守爾)編注のテキストは雑誌「ブラック(ブ拉克)」(源泉)1993年第1期に発表された。当該書の冒頭はつぎのような文句で始められている。

Karahan ulusni tüzätti bilip
Hundani unutup yaman ix kilip

カラハンは、すべての領地を知っている^④
アラアを忘れ、悪事をなした

『ガザルのオグズ・ナーメ』の主な内容は、「オグズ・ナーメ」第1種のテキストとよく似ている。

第3種は、『突厥世系』(Şəjərai Türk)と『土庫曼世系』(Şəjərai Tırakiyə)のテキスト。『突厥世系』と『土庫曼世系』は17世紀のヒヴァ汗国の国王で歴史学者アブルガジ(阿布勒哈孜 Abulghazi 1603～1664)の著書である。この作品は散文体でチャガタイ・ウイグル語によって書かれている。

第4種は、『デデ・コルクト』(達達闊爾庫提 Dədəqurkut)のテキスト。『デデ・コルクト』は、中央アジアテュルク語系諸民族においてオグズ語で伝承されている叙事詩である。オグズ語は西部テュルク語の通称である。トルコで出版された『Türk Dil Bilgisi—土耳其語法』では、『デデ・コルクト』の中でも回鶻語(古代ウイグル語)の要素が見られると述べている。この書の一章はオグズの伝説についてであり、その主な内容は「オグズ・ナーメ」の第1種のテキストと似てい

る。

第5種は、『Kisasul gharayip—驚案伝奇』中のテキスト。『驚案伝奇』は、モッラー・ムハメッド・ニヤーズ（全名はモッラー・ムハメッド・イ・ビンニ・アブドフブル）がイスラム暦1274年（西暦1857～58年）にヤンルカンドでチャガタイ・ウイグル語によって書いたものである。この書の中にはオグズ可汗に関する描写が千字あまり見られる。

第6種は、『Tarihiy kashghar—カシュガル史』（別題『チンギス汗伝』）のテキスト。本書は、モッラー・ミール・シャリフ・カシュガルが19世紀初めにチャガタイ・ウイグル語によって書いた歴史書である。本書の中にもオグズ可汗に関する描写が千字あまり見られる。

第7種は、ウイグル族の学者モッラー・ムサ・シャイラフが1908年に書いた『ハミード（伊米徳）史』と『安寧史』のテキスト。『伊米徳史』の中にはオグズ可汗に関する描写が1500字ほど見られる。

上記でふれた7種以外に、最近タシケントで発見された「オグズ・ナーメ」の二種のテキストとロシアのカザン大学図書館のテキストがある。この他に、歴史学者の牙孜其札徳・阿里の『阿里・塞爾柱克亜史』（Ali Salqukiyā）⁵の中にもオグズの伝説の一部が見られる。

2. タジク—ペルシャ語版本

第1種は、イル汗国の有名な歴史学者ラシッド・ウッディン（拉希特丁 1247～1317年）の『史集』（1310～1311年）中のテキスト。ある学者によれば、本書の原稿は突厥語で書かれたもので、ラシッド・ウッディンが突厥語のテキストによってペルシャ語に訳して『史集』に編入したとのことである。

第2種は、ティムール帝国のサマルカンド支配者ウルグ・ベグ（兀魯伯または烏魯格・貝格、烏魯格・伯克 1394～1449年）による『Tarih abira ulus—四個兀魯思史』中のテキスト。兀魯伯は突厥語、ペルシャ語とアラビア語に精通していた。かれはテュルク語系諸民族とモンゴル族に流伝していた神話や伝説を集めて整理し、ペルシャ語で『四個兀魯思史』を書いたのである。ウルグベクの書いたオグズ汗はテュルク—モンゴル人民の共通の祖先であり、オグズ部落はテュルク語系とモンゴル語系諸民族の主要な構成集団でもある。オグズ部落の歴史は古いだけでなく、中央アジア地域における活動範囲もたいへん広がった。ウルグ・ベグはテュルク化したモンゴル部落の後裔であり、かれが描いたオグズ汗像の複雑さは美学を追及する歴史家の理想を表わしていたのである。

第3種は、ティムール王朝の著名な歴史学者ハーフィズ・アブル（哈菲茲・阿卜魯 Hafiz Aburu ?～1430年）が著した『歴史の精華』（Zabdatul Tawarigh）(?)の中で記載されたテキスト⁶。かれの全名は希哈布丁・阿卜杜・拉蒂夫・喀瓦菲で、アフガニスタンのヘラート市で生まれた。

この他に、11世紀のペルシャの歴史学者迦爾迪之（Gadizi）の『記述の装飾』（Zaynul ahbar）⁷ともう一人のペルシャの歴史学者米爾赫邁徳（Mirhuandi 1433～98年）の『純潔の花園』（Rawaza-ts safa）⁸、謝爾夫丁・艾力・葉茲徳の『武功記』などの著書の中にもオグズ汗伝説に関

する内容の一部が見られる。

以上に列挙した「オグズ・ナーメ」のテキストとオグズの神話や伝説の主な文献以外に、幾人かの学者は別のテキストについてふれている。これについて、つぎに紹介して分析しよう。

第1に、新疆南部の「オグズ・ナーメ」の10世紀の写本に対する見方。

程溯洛教授はかつて「ウイグル族が自民族の文字で歴史を記載したのはたいへん早かった。10世紀に、天山南路には無名のウイグル人が回鶻文字で書いた『烏古斯可汗伝説』一篇があり、その写本の原本は、断片が廻りめぐってパリのHerr Char les schërの書庫に収められ、後に19世紀の末に帝政ロシア時代のテュルク語学者ラドロフ（拉得洛夫 W. Radloff）が取得し、影印あるいは満州文字（回鶻文字は活字がないため）で印刷し、その著書『バラサゴンのユスフ・ハス・ハジブの「福楽智慧」』（Das kudatku -Bilik des Yusuf chass Hads -chib aus Balasagkun）の末尾に附された。かれはこの書の序言でドイツ語によって「オグズ可汗、ウイグル民間に伝わる歴史的な断片について」という紹介を書き、その最後の地点は新疆南部にあり、伝説の定型化およびその記載の時期は早くとも10世紀だとしている」と記している^⑩。

このような観点は、陳永齡主編の『民族詞典』^⑪と国家民族委員会主編の『維吾爾族簡史』^⑫のように、わが国の学者たちもずっと賛成してきた。

劉志霄は『維吾爾族歴史』の中でも10世紀ころにオグズ汗伝説が新疆南部で流伝していたという観点を強調している^⑬。

フランスのパリには「オグズ・ナーメ」のテキスト数種が所蔵されている。耿世民教授はパリ国立図書館の回鶻文写本が現存する唯一のテキストであると考えている。ラドロフの考釈と翻訳による版本もこのテキストである。耿世民教授は「オグズ・ナーメ」を転写し、翻訳と研究をする過程で、前半の8頁はラドロフの刊行した影印本にもとづき、その他の部分はバング（班格 W. Bang）、ラフマット（拉赫馬提 R. R. Rahmatti）が1932年に「德国科学院紀要」で発表した版本と1959年にソ連の学者シェルバック（謝爾巴克 A. M. Sherbak）が刊行した版本を参考にしている。フランスのペリオ（伯希和 P. Pelliot）は「通報」（1930年）で「オグズ・ナーメ」中の文について考釈している。

パリが収蔵しているのは「オグズ・ナーメ」の版本の一種であり、程溯洛教授が参考にしたラドロフの刊本はおそらくパリ国立図書館収蔵の、所蔵番号Suppl.turc,1001の「オグズ・ナーメ」テキストであり、耿世民教授がわが国で発表した「オグズ・ナーメ」版本でもあると、私たちは考えている。

この他に、本書の書写と新疆における伝承地点については、異なる観点が見られる。

耿世民教授は、『オグズ・ナーメ』の「序言」でつぎのように述べている。「私たちはフランスのペリオ氏の意見に賛同する。原写本は元朝（1206～1368年）に新疆のトルファン地域で回鶻文字によって書かれたものである。現存のパリの写本は15世紀頃にソ連の七河一帯（現在のカザフスタン境内）で書写された」

程教授はラドロフの観点にもとづいて、「オグズ・ナーメ」は「その最後の地点は確かに新疆南部であり、伝説の定型化と文字の記載の時期は、10世紀以後である」と認めている。「オグズ・

ナーメ」の書写の時期と地点についてさらに研究を継続すべきだと、私は考えている。

第2に、「オグズ・ナーメ」は5世紀にペルシャ語に、9世紀にアラビア語に訳されたという見解について

新疆のカザフ族学者ウマルカジ・エタン（烏瑪爾哈孜・艾旦）は『ソ連カザフ大百科全書』第8巻第439頁の項目によって、つぎのように述べている。「『烏古斯之書』は5世紀中にペルシャ語に訳され、9世紀にアラビア語に訳された」¹⁸

長らく、この観点は新疆のカザフ文学の研究面に大きな影響を与えた。国内外の学者の考証によれば、9世紀以前には「オグズ・ナーメ」を書いた文献資料は発見されていない。同時に、5世紀にも写本はない。このような状況では、ペルシャ語とアラビア語の訳者はどの写本を用いたのだろうか？「オグズ・ナーメ」研究に従事する学者はどの時代にペルシャ語とアラビア語に訳したかについて言及しなかったのである。

第3に、『ラシッド史』中に「オグズ・ナーメ」のテキストがあるという見解について。

『中国大百科全書・中国文学』第980頁では、「…この他に、ミルザ・ハイダール・ゴルガン（米爾扎・海衣黛爾（すなわち海達爾）・郭爾剛）の『ラシッド史』の中には、オグズ伝説に関する記載がある」と述べている¹⁹。

W・胡普爾、ə・胡賽因は『維吾爾古典文学綱要』の中で「『オグズ・ナーメ』は、多くの歴史家の著書（その中には16世紀の歴史家ミルザ・マヘマ・ハイダール・グルガン（米爾咱・馬黒麻・海達爾・古力干）の『ラシッド史』を含む）に記載されている」と述べている。10数年来、このような観点はウイグル古典文学の研究面に大きな影響を与えてきた。『ラシッド史』の漢語版が出版されてから、私たちはなんども見たが、「オグズ・ナーメ」に関する記載は見つけることはできなかったのである。

§ 2. 「オグズ・ナーメ」の名称問題

「オグズ・ナーメ」の名称はさまざまであり、およそ以下の数種がある。

1. 『古代維吾爾史詩烏古斯可汗伝説』 刊行者 耿世民、吐爾遜・阿尤甫 新疆人民出版社 1982年 ウイグル語版
2. 「烏古斯可汗的伝説」（維吾爾族古代史詩） 刊行者 耿世民 新疆人民出版社 1982年 漢語版
3. 『烏古斯伝』（突厥民族史詩） 耿世民 馬坎校注整理 民族出版社 1986年 カザフ語版
上記以外に、「烏古斯神話」、「烏古斯伝説」、「烏古斯史詩」、「烏古斯胡故事」、「烏古斯伝記」、「烏古斯歴史長詩」などがある。

なぜ「オグズ・ナーメ」にはこのように多くの名称があるのだろうか？「オグズ・ナーメ」が発見された時期には固有の名称がなかったためである。19世紀初期に、オランダの学者ディーツ（狄茨 Dietz）が叙事詩の内容の一部を翻訳して刊行し、『Der Neuentdeckte Oughuzische Cyklop』（新発見のオグズ・ナーメ）と題した。それ以後、ラドロフ、リザ・ヌール（里扎・奴

爾 Riza Nour), ペリオ, バング, ラフマツト, シェルバックなどの学者たちが新版を刊行したときに、「オグズ・ナーメ」(Oghuzanamə 烏古斯之書)という名称を使用した。

Oguzはこの叙事詩の主人公であり、主人公の名を付けるのはウイグル古典文学作品の特色の一つなのである。国外の学者がなぜ「Oghuznamə」という名称をという名称を選んで使用したのだろうか? 「Oghuz」は主人公の名前である。「Namə」はアラビア語で、この語は「印刷物」「書簡」と訳すことができ、書簡形式で書かれた文学作品を指している。初め、それは民間文学、特にウイグルなどの民族の民間文学作品における抒情二行詩から発生した。

チャガタイ・ウイグル文学時代には、多くの作者が自分の作品の中で「namə」という名称を用いた。たとえば、「Sidiknamə」, 「Lətafətnamə」, 「Dəhnamə」, 「Jahannamə」, 「Mahmutnamə」, 「Baznamə」, 「Silatinnamə」, 「Məshuknamə」, 「Təəshuknamə」, 「Muhabbatnamə」などである。その時代には、作品の題名の後に「namə」という語尾を付ける習慣があり、このため「オグズ・ナーメ」に「Oghuznamə」という名称を付したのである。私は、漢語で「Oghuznamə」を「烏古斯伝」や「烏古斯伝説」と訳すのは科学的でないと考える。

国内外の学者は一致して、「オグズ・ナーメ」が原始社会後期か階級社会初期に生み出されたと見なしている。オグズ可汗は部落連合体の首領であり、英雄的な可汗で統帥でもあった。「オグズ・ナーメ」は叙事詩の特色をそなえ、オグズ可汗の伝記でも伝説でもない。オグズはウイグルを含むテュルク系諸民族の部落集団の英雄の形象である。だから、漢語では「烏古斯史詩」あるいは「烏古斯之書」と訳すべきなのである。それを「烏古斯史詩」と称するのは作品の具体的な内容と一致し、「烏古斯之書」と称するのはチャガタイ・ウイグル文学作品の漢語訳の習慣と一致している。

§ 3. 「オグズ・ナーメ」におけるウイグル族原始信仰の痕跡

宗教は信仰の重要な構成要素であり、最も早く発生した社会意識の形態でもある。原始社会はいくつかの歴史的段階に分けられ、信仰は同一対象を崇拝する宗教である。原始社会では、信仰は多くの状況において合わさって統一体になるが、時代的な限界も免れない。社会信仰は大概念であり、それは多くの個別の概念から構成されている。以下では、古代社会のウイグル族の信仰、および原始社会の宗教信仰が「オグズ・ナーメ」の中に反映している痕跡について検討しよう。

1. 原始トーテム信仰

「オグズ・ナーメ」はウイグル人の原始宗教信仰—トーテムに関する認識を反映している。「オグズ・ナーメ」の中で、オグズ可汗の征戦はすべて蒼いたてがみと青い毛の狼が道案内をしている。オグズ可汗は人びとに「蒼き狼こそわれらが目じるし」と告げている。これこそきわめて明確なトーテム信仰である。

トーテム信仰は人類社会の中で最も早くに形成された信仰である。人類の原始社会のある段階

で、人びとは野生植物の採集と狩猟によって食物を保存した。その頃、植物と動物は人類の生存に欠くことのできない物であった。動物について言えば、初め人びとはそれを自己の生存に対し有力な影響を与え、不思議で特殊な力を生む物と見なして崇拜した。もう一方で、虎、狼、豹、蛇などの動物はすべて人を食べ、傷つけ、噛むという特徴をそなえている。もしも人びとが動物の害に備えていなければ、安心できなかつた。この他に、動物の臭覚と視力、猛獣の爪、鳥禽類の飛行動作と羽や尾翼の奇異さ、魚類の遊泳能力などは人びとの興味を引きつけたのである。人びとは、これこそ人が持っていない能力だと考えていた。時には、ある種の困難にぶつかると、人びとはかれらの保護を得ることを望んだため、それらが神秘的な偶像になった。

植物に対する崇拜も客観的な事実から得られたものである。人と動物はいずれも時間の流れとともに滅亡する。しかし、かなりの植物は数百年、数千年の成長後に枯れる。ある樹木は枯れないだけでなく、発芽し、長らく緑色を保っている。ある植物は非常に強い繁殖能力を持っている。人びとはそれらを崇拜し、それらに助けを求める態度を持たざるを得ない。

もう一方で、ある植物は人びとの生活資料の源であるため、人びとはそれに依存する態度を持つ。これらの植物はいつでも人びとの願望を満足することができる。ある果樹は数年で実が成り、あるものは数年も収穫がなく、時には自然災害に遭う。このような状況に対し、人びとは樹神の神通力だと見なした。

動物崇拜と植物崇拜は原始社会の中期に形成された意識形態の一種である。この段階は一般には無知蒙昧な原始社会の段階である。考古学の理解によれば、石器時代の中期である。無知蒙昧な年代には、生産力が非常に低く、原始的な蓄積と漁業経済の発展は非常に緩慢であるため、人びとの社会組織は基本的な血縁関係を基礎にして作られている。この母系氏族の段階に生存する人類は、抽象的な思惟の能力があっても、かれらは自然界の植物や動物と自己との区別をはっきりできない。人類の無知のため、ある種の植物や動物を自己の祖先と見なす。「オグズ・ナーメ」中ではオグズと木のほらの娘とが結ばれて人類を生み出す。同時に、狼を烏古斯部落の標識とするのは、古代ウイグル人が樹木と狼を崇拜したことを表している。

2. 祖先崇拜

「オグズ・ナーメ」の中で、主人公オグズが抜群の能力をそなえていることを特に描いている。その6人の娘の名前にはある意味が含まれている。オグズの人物描写は独特で、たとえばかれについてこう描いている。

「ある日のこと、アイハンは出産し、ひとりの男の子を生んだ。この子の顔は青く、口は真っ赤で、天神よりずっと美しかった……かれには雄牛のような脚、狼のような腰、黒豹のような肩、熊のような胸がそなわり、全身びっしりと毛を生やし……」

これらの描写から、オグズが神格化されていることが明確に分かる。人を神格化し崇拜するのは原始信仰の特色の一つである。宗教界の見解では、すなわち「祖先崇拜」である。祖先崇拜はトーテム崇拜の後に形成された信仰の一種である。人類は長らくトーテム信仰という単純で幼稚な信仰のもとで過ごしていた。社会の生産力の発展、人類の知識と経験の蓄積とともに、人類は

自然界の神秘に対する認識を深め、それらと自己との差異を合理的に区別できるようになる。植物と動物を崇拝し、客観的にトーテムを信仰することから、人類が自分の古い祖先を崇拝することに転換したのである。もしもトーテム信仰が原始社会の母系氏族時代の産物だと言うならば、祖先崇拝は父系氏族時代の産物なのである。この時の人類は氏族中の古い祖先を貴人として崇拝していた。

これ以後、人類は低水準のトーテム崇拝の幻想と意識よりも一歩進めて、氏族の団結を保つために、人類の歴史の真の起源を最初の祖先に近づけたのである。父系氏族のコミュニケーションと母系氏族のコミュニケーションの発展は特殊な生産力を基礎にして作られている。この時、人類と自然界には区別があり、このような意識は歴史上で非常に巨大な変転であった。祖先崇拝の段階ではどの種族の間でも述べられている祖先は、最初の古い祖先である。この祖先はトーテムとは異なり、かれは上帝のような人で、自分の種族の発展と隆盛に終始気をつけている。だから、父系氏族の段階で暮らしていた人びとは祖先に祈り使者を祭る過程の中で、ほとんどいつも祖先の偉大な功績を推測し、想像し、誇張して、自分が蓄積した実際の経験を祖先に付加し、人類が大自然を征服する過程で、半人半神の英雄的な人物の叙事詩を創造した。原始の人類はかれらの権威を高めると同時に、自己の種族の地位も高めた。

「オグズ・ナーメ」の中のオグズ可汗は長期の社会闘争において創造されて半人半神の特徴をそなえた英雄である。オグズは月から生まれ、ふつうの人とは異なり、獣のことが分かり、いかなる凶悪な猛獣も恐れず、その風貌は猛獣のように猛々しい。オグズと結ばれた娘たちはみな仙女のようである。「これらの娘が笑う時には、天も笑う。泣く時には、天も泣く」、世の人はそれを見て、「ああ、なんと美しいことか」としきりに言う。オグズ可汗の晩年には、国土のすべてを自分の息子たちに分け与え、かれらは突厥部落全体を支配した。当時、オグズ可汗によって回鶻、カルルク、キプチャク、高車と呼ばれた人びとは、みな古代の祖先崇拝の信仰と密接な関係があった。だから、「オグズ・ナーメ」の中にはウイグルの祖先崇拝を鮮明に反映しているのである。

3. 自然崇拝

ウイグル人の原始信仰の構成部分となっている自然崇拝は、「オグズ・ナーメ」の中に非常に生き生きと全面的に反映している。人類の宗教信仰において、自然崇拝は長らく継続していた。自然崇拝は祖先崇拝の後に形成された社会信仰である。社会の発展とともに、父系氏族社会部落連合に発展した。部落連合は軍事的民主制を実施し、連合の首領は盟約を結んだ各氏族部落の長者に推薦され、軍事面では最高司令官であり、宗教面では最高の財産管理者であった。あたかも崇高で威望のある部落連合の長者が異なる氏族部落を連合させるように、天上にも自然界のさまざまな自然現象を支配し、それらを統合する最高至上の上帝がいる。このために、自然の支配を司る天神という概念がこの時期に形成されたのも偶然ではなかった。

人類の生命と自然界は密接に連なり、自然と自然現象はかれらの生活に大きな影響を与えていたのである。風、雪、雨、雷、洪水、気候の変化、季節の交替などは、人類の生活において、い

ずれもかなめの問題であった。古代人は自然の秘密をまったく知らず、「ある種の力」が作ったものと誤解していた。この「力」はどこにあるのか？ 気候の変化、風、雪、雨、雷などは天と関係している。このような自然現象は一時的なもので、たちまち過ぎ去るが、青天は人類のなかまとして続けて存在する。限りなく広々とした天空は古人の興味を引いた。このような状況で、古代人の意識に「ふしぎな力」が生まれた。このために、青天に加護を祈る信仰を基礎にして、天神の概念が生まれた。

「オグズ・ナーメ」の中で、「青」という語に対して特別の解釈が見られる。古回鶻語では、天を「青」と言っている。例えば、「蒼い毛、蒼いたてがみの狼」、「オグズの顔は青かった」。ここで言う「青」は人類が崇拜する天神のことであり、神の宿るところである。オグズ可汗の言う「天佑」とは天神の加護を祈ることであり、人類の自然崇拜は天神を主としている。天神を崇拜すると同時に、古代の人類には、天上の太陽、月などを崇拜する信仰の意識があった。

上古の時代、人類はある地域で安定した生活をしていたが、居住地の自然条件は、時間の推移とともに常に変化した。しかし、天上の日、月、星はかれらに付き添っていた。古人が天空を仰ぐとき、注意したのはまず天上の日、月、星などの客観事物だった。人びとが最も注意したのは天空で東から出て西に沈む太陽であり、それは生活に大きな影響を与えた。それは毎日上昇し、その光は鮮やかで、限りなく光を放っている。日没後には暗黒と寒冷がもたらされる。太陽は時には暖かさをもたらして、植物の成長を促し、生命を保たせる。時には灼熱の光を放って苦しめ、河水を枯渇させ、大地は早魃となり、植物は枯れ、人と動物に害を加える。世界の諸民族には太陽を崇拜する習慣がある。

オグズ可汗は民衆を集めて、儀式を催し、ある場所の両側に長さ40ひろの竿を二本も立てて、東の端に金の鶏、西の端に銀の鶏を下げて、日月の崇拜を表わした。金の鶏は東に昇る太陽を象徴し、銀の鶏は西に現れ白色を示す月を象徴している。「鉄爾渾碑」（西暦753年建立）の中にある「わが前面は日の出の方の人びと、わが背後には月の出の方の人びと、われに『かれら自身』の力を与えよ」という文から、日月がどこから昇るかについて古代ウイグル人がどのように見ていたかをはっきりと知ることができる。

「オグズ・ナーメ」の前半部分には、「ある日のこと、アイハンが出産し、……」とある。これは「アイ」（月）の後に「ハン（汗）」という語が加えられ、神格化された「月」の再現である。古代には、人びとは長者、可汗を上帝の地位に置いて扱う観念があり、これが祖先崇拜の信仰であり、原始信仰と交替している。だから、日、月、青、ハンの概念の意味は同じであり、それらはすべて天神の概念に含まれると言えよう。

「オグズ・ナーメ」では、オグズの前妻に対しこのように描かれている。「彼女の額には炭火のようにきらきら輝く痣があり、まるで金のくいのようだ」。これは星辰崇拜の具体的な表現である。星辰の崇拜は天体あるいは自然を崇拜する信仰の一種である。星辰は日月のように、青天にあり、広大で無限な夜に、天空を金の首飾りのように色とりどりに飾り、古代人の興味を強く引きつけた。星は天上でさまざまな形になって移動し交替する。銀河、北極星、北斗星、流れ星、天秤星およびその他の星は、非常に神秘的なものと感じさせる。古代のウイグル

人は北極星を金のくいと称した。くいを地面に打って物を縛りつけ、くいを壁に打って物をかけるのは、ウイグル人の日常生活の習慣で、古代のウイグル人は牧畜に従事するときくいを広く用いた。天上の星の群れ、銀河は季節の交替とともに地球の一部と相対して移動する。北極星は四季に天上に固定されてくいのように動かない。このような状況では、古代の人類は自然とそれを大地のくいであると理解するようになった。

周知のように、金は自然界で人類がもっとも早く使用した金属の一つである。古代の人類にも、鉱石を崇拝する観念があった。金でくいを形容したのは、一方で星に金色があり、もう一方で鉱石を崇拝する観念もあったからである。「青い光」はもちろん日、月、星を崇拝する構成部分である。明らかに、「光」は最も早くには日、月、星だけから生じている。人類はそれらから光明を得て、保障された。太陽について言えば、その基本的な特徴は発光であり、くもりの日には太陽は暗く、光線が不足する。人びとが自然を崇拝する習慣によれば、天神もいるし地神もいる。

古代ウイグル人の信仰もこのようなものであった。例えば、「キョル・テギン」(732年)の東面第1行には、「上には蒼天あり、下には褐色の地あり、二者の間に人類の子が創造された」と記されている。古人は山、河、海、草原、洞穴、森林、丘を神格化した。このような事物と人類の生活とは密接な関係があった。

古代の匈奴は死体を丘に埋め、突厥人は山に兵舎を作り陣地を構えた。かれらは新疆で最大の山を「天山」と称した。人びとの母なる土地の一つであるシベリヤ北部最大の河流を、突厥語でイェニセイー母なる河と称した。これはいずれも生き生きとした例証である。「オグズ・ナーメ」の中では、森林、河流、山などに対し特別に描写している。

「オグズ・ナーメ」では、天神を大地の上に置く、あるいは天外の物を物体の上に置くという観念に対して具体的な描写をしている。例えば、「天から下ってきた、および青い光の中に現れた異常に美しい娘がオグズの妻になった」と述べられている。作品では特殊な誇張の手法で妻の額にある痣が天空中の金のくい(金のくい—北極星)のようだと描いている。「彼女はこのように美しく、彼女が笑えば天も笑い、彼女が泣けば天も泣く」。

オグズの妻が生んだ子も天あるいは大地の名前である日、月、星などが付けられている。その三人の息子は東方へ行く。ひとは金の弓(弓矢の主要な部分)を探し、オグズ可汗の挙行する盛大な儀式の時に、東方(太陽の昇る方向)に坐る。オグズ可汗は金の弓を三つに分け、それぞれ息子たちに与え、「汝ら弓のごとく、矢を天に放て」と命じた。オグズ可汗の息子たちは「灰矢」と呼ばれた。弓が三つに分けられているため、「折られた矢」とも言われた。

この三人の子はオグズ国の柱であり、国家の支配者であった。祝賀式で、右側(東)に坐った。かれらの側には、40ひろの竿が立てられ、先端から金の鶏が下げられていた。オグズのことばによれば、弓で矢を射るなら、矢は弓に属している。金の弓は日の出のところから日没のところまで延び、三本の銀の矢は北(北極星)を指している。オグズの東の汗国は金汗国である。

オグズの妾は木の洞から生まれ、彼女の肖像の描写は物体を描く固有名詞で表現され、「髪の毛は流水のよう、歯は真珠のよう、人びとは彼女を上帝と呼ばないが、彼女をみるたびに『ああ、彼女はとても美しい』」とある。

三人の息子はそれぞれ大地を描く固有名詞で青，山，海と称している^⑤。かれらは太陽の照らさないところへ三本の銀の矢を探しに出かけ，オグズ可汗はこの三本の矢を儀式で息子たちに分けて与えた。かれらはオグズ可汗が挙行する儀式で西側に坐った。そこにも40ひろの竿があり，竿の端から銀の鶏が下げられていた。それらはいつも「三矢」と称せられ，三本の矢は弓に服従し，支配された。オグズの西側の汗国「ウルム（烏魯穆）汗国」と称された。

オグズ可汗の妻に関することは，以下のようないくつかの面から明らかにすることができる。オグズの妻が木の洞から生まれたことは，明らかにトーテムと関わり，この婦人に関するその他のことはすべて二次的な地位にある。

「オグズ・ナーメ」では，オグズの母は「アイ可汗」と称されている。ある人びとは，オグズの父親はおそらく「太陽可汗」だろうと考えている。これには根拠があるかもしれない。現存の回鶻文「オグズ・ナーメ」の冒頭と末尾は欠損している。上述の事実から考えると，典型的な男性支配社会の時代に成立した「オグズ・ナーメ」は，オグズの母親の名だけしかふれないで，その父親の名にふれないことはあり得ない。もう一方で，「オグズ・ナーメ」から見て，ウイグル人には，人に「太陽」と名づけることはすでに習慣になっていた。だから，オグズ可汗が父の名「太陽」を，自分の子に名づけたのである。自分の父親の名を孫，曾孫，はては実の子に名づける習慣は，現在でもウイグル人に存在している。オグズの6人の子が，それぞれ太陽，月，星，山，海，青と名づけられたのは，明らかに自然崇拜の観念に由来している。

「オグズ・ナーメ」には，オグズ可汗の右（東）側に金汗国，左（西）側にウルム国があるという記載が見られる。

言語学者マフムード・カシュガリーは「烏龍（urung）という語は，白という意味を表わしている」と説明している。現代ウイグル人にも，このような伝統がある。ある家でもしも一人（主に子どもを指す）が病にかかったら，母親は子どもを7軒の隣家に行かせて，「yurung」（口語ではjurung）を求めさせる。子どもたちは隣人たちにもらったyurung（主に綿花や白い布）をもって帰り，母親はそれらの物を持って，病人のベッドで祈りのことばを唱えながら，ベッドのまわりをめぐる，かまどの中で焼いてしまう。カザフ人はこれを「白を祈る」と言う。要するに，ウイグルの人びとはこのような方法で病をなくそうとしたのである。

ホータンにはユロンカシ河があり，カシ河の向かい側にあつて，河の名の意味は「光明の方の河流」である。「オグズ・ナーメ」の中のウルムという語はウイグル語である。「鉄爾渾碑」の碑文では，人の名前に「urung」，「uluk urungi」と書かれている。「烏龍」という語は言語学者マフムード・カシュガリーの「白色」と説明している。「烏龍」という語は「烏魯穆」と発音上は大きな区別がなく，あるいは一つの語とも言え，意味は「白」なのである。

ウイグルの祖先は紀元前8世紀には「白狄」と「赤狄」の二つの部落に分かれていた。だから，金汗国は古代ウイグル人の赤狄であるかもしれない。けれども，かれらはなぜこのように称したかというならば，あきらかに同じように太陽と月に対して崇拜する信仰と関係があった。太陽は金色で，見たところ真っ赤な物のようなものである。古代ウイグル人の中で，太陽を崇拜する部落はすべて赤い衣を着て，太陽に対するかれらの崇拜の念を表わした。月は銀白色で，見たところ樟腦

か白い珠のようである。月を崇拜する古代ウイグル人の部落は白衣を身につけ、月に対するかれらの崇拜の念を表わした。太陽は東から出たため、ウルム汗国はオグズ可汗の西にあった。近年まで、ウイグル人の労働者の中には、赤い着物を着る男たちや、白色の服を着る女たち（男もいる）を見ることができる。つまり、「オグズ・ナーメ」には、自然に対するウイグルの先人の崇拜が生き生きとはっきり反映しているのである。

4. シャーマニズムの影響

シャーマニズムの影響を「オグズ・ナーメ」の中の習俗に見ることができる。なぜなら、シャーマニズムはウイグル人が最も早くに、長らく、広範に信仰した宗教であり、それがウイグル人の社会意識に深く浸透していたからである。シャーマニズムは天神を中心にして、多神教から移行した宗教の一種である。

漢文の記載によれば、紀元前8世紀にウイグル人の祖先は白色と赤色の服装を着ていたために「白狄」と「赤狄」と呼ばれ、これはあきらかにシャーマニズムの影響を受けていた。シャーマニズムは四色でそれぞれ東西南北を指している。例えば、藍色は東、赤色は南、白色は西、黒色は北を示した。シャーマニズムは大自然を崇拜する原始信仰とともに発生した宗教の一つであるため、その信仰の内容と形式および規則はほぼ同じだった。

「オグズ・ナーメ」の中で、オグズ可汗はその盛大な儀式において、長さ40ひろの竿の先端から金の鶏を垂らし、東のめじるしとした。もう一本の竿から銀の鶏を垂らして西を示した。竿の下端に白い羊をつないで西を、黒い羊をつないで北を指した。

色に対する偏愛は、古代ウイグル族の日常生活においてさまざまな面に表わされている。古代ウイグル人の旗が絹で作られるなら、かれらのテント、服装と馬具もすべて旗と同じ色であった。匈奴の単于は色の順によって騎兵を組織した。偉大な歴史学者司馬遷の記載によれば、匈奴の天子冒頓は紀元前200年に40万の匈奴の部隊を率い、青い馬の騎兵は東から、白馬の騎兵は西から、黒馬の騎兵は北から、赤馬の騎兵は南から、現在の大同市付近で漢の高祖の10万の兵を7昼夜も包囲するように命じた。

「オグズ・ナーメ」に記載された事件は、今でもシベリヤのヤクート人のあいだに伝えられている。19世紀末、ヤクート人としてしばらく過ごしていた学者のイ・ベカロスキーは自分の眼で見たことを詳しくノートに記している。例えば、ヤクート人はいつも空き地に二本の竿を立てて、竿のあいだに縄をつなげ、屠殺して神霊にささげる家畜を竿の下につないでいる。

伝統的な観念と風俗習慣は民族を区分するメルクマールの一つである。ウイグル族は長期にわたって独特の社会観念と風俗習慣を形成してきた民族である。ウイグル人は古代から「白色」を幸福、吉祥、幸運、美、思いのまま、喜びの標識としていた。白色で善人を、黒色で悪人を形容した。人を見送る時には、誠意をこめて「どうか白い色の旅でありますよう」（一路平安の意）ということばで祝福する。白ひげの老人と白髪のお婆はとりわけ尊敬される。もしも河水が長らく干上がったり、ひでの時には、農民たちは河の水源で白い羊を屠殺し、アッラーに水の恵みと、五穀豊穡を祈る。

人が病気で臥せっている時には、黒い羊を屠殺して、患者の首に羊の血を注いだり、羊の皮を患者の体にかぶせることで、病を追い払い、痛みと精神的な負担を減らそうとする。葬式の時には、男子は黒衣を着て、腰に白布をつけ、悲しみと哀悼の念を表わす。女子は頭に白い紗をかぶり、苦痛の気持と悲しみに打ち勝つ願いを示す。

以上で述べたことをまとめれば、ウイグル人の伝統的な観念と風俗習慣は「オグズ・ナーメ」の中に全面的に反映している。オグズ可汗は晩年に盛大な儀式を催し、息子たちに国を与えた時、広場の両側に二本のくいを立ててそれぞれ白い羊と黒い羊をつなぐように命じた。「オグズ・ナーメ」の中では、必ずしも二頭の羊を屠殺しなければならないとはっきり述べていないが、もしも白い羊を屠殺するなら、幸福、思いのままになることの象徴であり、黒い羊を屠殺するなら、憂いや災いを除くしるしだと認めることができる。

「オグズ・ナーメ」に対する以上のような分析から、それがまったく宗教的な作品だと見なすことになる。古代では、どのような芸術的な形式もすべて宗教と関係している。宗教は必然的にある種の芸術の形成に影響を与えている。なぜなら、「民衆に影響を与えるすべての精神的な手段の中で、主要で最も重要な手段はすなわち宗教である」。

古代では、文学芸術は宗教と一つ一つ関係があった。例えば、絵画を例にすれば、人びとが最も早くに描いたのは自分が崇拝する偶像であった。彫刻と塑像に、人びとが創造したのはかれらが信仰する天神の像であった。舞踏芸術では、偶像を思い、従い、服従することを内容とする。文学も同じように偶像をうたい、思念し、かれらのために神曲をうたうのが、その時代の文学の特徴になっている。例えば、インドの「リグ・ヴェーダ」、ギリシャ人の「イリアード」、「オデッセウス」、イラン人の「アヴェスタ」はこのような作品である。

エンゲルスはかつて「あらゆる宗教は人びとの日常生活を支配している外部の力が人の頭脳において反映した幻想にすぎず、この種の反映において、人の力が超人間的な力を得たのである。歴史の初めには、先ず自然の力がこのような反映を獲得したが、自然の力以外に、まもなく社会の力も影響を及ぼし、このような力は自然の力と同じように、人にとっては異質なものであり、最初は説明できないが、それは同様の表面的な自然が必然的に人を支配する。最初は自然界の神秘的な力だけを反映した幻像が、今では社会的な属性を獲得し、歴史的な力の代表者となる」と述べている⁹⁾。

もしもエンゲルスのこのことばを「オグズ・ナーメ」に関係させるならば、その中で表わされている力は、歴史の力の代表である。「オグズ・ナーメ」の宗教的な外殻を剥ぎ取り、残ったものがその現実的な内容であるのは、論争する余地がないことである。

「オグズ・ナーメ」はウイグル人の古代信仰、風俗習慣、伝統、社会関係を理解し、古代ウイグル社会を研究するための重要な文献であり、優れた文学作品で歴史記録である。

最後に、付け加えて指摘する必要があるのは、「オグズ・ナーメ」は10世紀前後に形成され、その時代の産物だと、いく人かの人が認めていることである。このような観点はなりたたない。仏教が新疆に流入してすでに2000年経ち、マニ教は763年にモンゴル高原で生活していたウイグル人の中に伝わったが、「オグズ・ナーメ」には仏教、マニ教（マニ教の影響があると認める人

もいるが), キリスト教, ゴロアスター教, イスラム教に関係するいかなる記載もなく, これは想像しにくいことである。要するに, 「オグズ・ナーメ」は大昔の産物であり, ウイグル人が原始社会から階級社会に移行する時に生まれたのである。たとえ「オグズ・ナーメ」の他の版本において, 後世の特徴が浸透していても, 回鶻語版本には, あまり明確でない。だから, 社会環境と社会信仰と関係させて分析すべきなのである。

原 注

- ① 『中国大百科全書 中国文学卷 (第1巻)』 中国大百科出版社 1986年 頁980参照。
- ② 『民族詞典』 上海辞書出版社 1987年 頁178参照。
- ③ 劉賓, 張宏超主編『上古至高昌 (回鶻) 汗国時期的文学』 新疆人民出版社 1995年
- ④ ulus 兀魯思 元の意味は「宗族」, 「部族」, 後に転じて「領地」の意味となる。
- ⑤ この書はどのような言語で書かれているのか, 情報がない
- ⑥ 巴哈依丁・烏格兒 (Bahaidin Uğul) 『突厥人的国家観念』 (トルコ語) 1982年 頁94参照
- ⑦ 加爾迪之『記述的裝飾 (摘要)』 王小甫訳 「西北史地」1983年第4期所載
- ⑧ 伊明・吐爾遜『塔里木拾錦』 民族出版社 1990年 頁507～508参照
- ⑨ 程溯洛『唐宋回鶻史論集』 人民出版社 1994年 頁3～25, 26, 27参照
- ⑩ 陳永齡『民族詞典』 上海辞書出版社 1987年 頁178参照
- ⑪ 『維吾爾族簡史』 新疆人民出版社 1989年 頁65～66参照
- ⑫ 劉志霄『維吾爾族歴史』 民族出版社 1985年 頁144参照
- ⑬ 『哈薩克古典文学論壇』 新疆人民出版社 1988年 頁98参照
- ⑭ 『中国大百科全書 中国文学』 中国大百科選書出版社 1986年 頁980参照
- ⑮ ここの「青」は天を指さず, 大地の緑—草原や山を指す。古代の人にとって, 青に対する崇拜が, 後に緑を尊ぶ感情を湧かせるようになった。これによって, かれらは特に限りなく広い草原, 茂って緑の森林に憧れるようになった。だから, 妾の息子二人がそれぞれ「山」と「海」と命名されず, もうひとりが「天」と命名されないのは考えられない。だから, 「kek」という語は, 現代ウイグル語によって「天」と理解するのは適切ではない。
- ⑯ 『突厥語大詞典』 新疆人民出版社 1981年 頁181参照
- ⑰ エンゲルス (恩格爾) 『反社林論』 人民出版社 1972年 頁354～355参照